



TITLE:

化膿セル膽嚢乳嘴狀嚢狀腺腫ノ1例
ニ就テ

AUTHOR(S):

山崎, 勲

CITATION:

山崎, 勲. 化膿セル膽嚢乳嘴狀嚢狀腺腫ノ1例ニ就テ. 日本外科宝函
1934, 11(4): 869-872

ISSUE DATE:

1934-07-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/203485>

RIGHT:

臨

床

化膿セル膽嚢乳嘴狀嚢狀腺腫ノ1例ニ就テ

名古屋市民病院外科（伊藤肇博士）

醫學士 山 崎 勲

Ueber einen Fall vom vereiterunden papillaeren Cystoadenom aus der Gallenblase

Von

Dr. Isao Yamasaki

[Aus der chirurgischen Abteilung von Nagoya Stadthospital, (Dr. Hajime Ito)]

63 jährige Patientin. 17. Jan. 1933. wurde sie mit der Diagnose "Leberabszess" in unsere Abteilung aufgenommen. Dann bis 18. Aug. wurden 5malige Inzisionen ausgeführt. Trotzdem täglich reichlicher zäher Eiter davon abgeleitet, trat die Heilungstendenz gar nicht auf und die Kranke starb endlich den 16. Sept. wegen allgemeiner Schwäche. Vom Eiter konnte man immer nur Streptococcus mucosus kultivieren. Durch genauere postmortale Untersuchung der Abszesshöhle erfanden wir am Boden einen Gallenblasentumor, der mikroskopisch papilläres Cystoadenom darstellte.

緒 言

膽嚢腫瘍ハ比較的稀ナル疾患ニシテ、ソノ中ノ大多數ヲ占ムル癌腫ニ就イテ觀ルモ、Kehr氏ニ依レバ解剖例ノ0.1乃至0.28%ニ膽嚢癌ヲ見出シ、且ツ200ノ癌腫例ノ中1例ノ膽嚢癌ガ存スル割合ナリト云フ。サレバ膽嚢腫瘍ノ中ニテモ少數ナル良性腫瘍ハ遭遇スルコトナク、且ツ良性膽嚢腫瘍ハ臨床上何等症狀ヲ呈セザルカ、或ハ呈スルトシテモ痼痛位ノモノーシテ特有ノモノニアラザレバ、ソノ大部分ハ見逃サル、コト多ク益々僅少ナルモノナリ。

文獻ニ徴スルモ手術亦ハ死後ノ剖檢ニ際シテ初メテ見出サレタルモノノミニシテ、例ヘバ Pels Leusden 氏ノ1例ハ剖檢ニヨリテ、Kehr 氏ノ4例及ビ Dominici 氏、Mölle 氏、Risak 氏、副島氏、Király 氏ノ各1例ハ手術ニ依リテ見出サレ居レリ。余等ハ肝臓膿瘍ナル診斷ノ下ニ9ヶ月ニ互リテ度々切開シテ處置セルモ、腫脹ハ少シモ減退セズ、終ニ不幸ノ轉歸ヲトルニ至リ、死後、膿瘍壁ヲ檢シテ膽嚢腫瘍ノ化膿セルモノナルコトヲ見出シ、腫瘍ノ一片ヲ鏡檢スルコトニヨリテ乳嘴狀嚢狀腺腫ナルコトヲ確定シタル臨床例ヲ經驗シタルヲ以テ茲ニ報告スル處アラ

ントス。

患 者 鹽田某，女，63歳 昭和8年1月17日入院。

家族歴 父ハ69歳ニテ胃腸疾患ニテ死亡シ，母ハ平常ヨリ度々腹痛ニ惱ミシガ，89歳ノ時激シキ腹痛ヲ訴ヘ，鎮痛ノタメ注射ヲ受ケシニ間モナク眠ルガ如ク死亡セリ。3人ノ兄弟，2人ノ子供アルモ總テ健在ナリ。

既往症 生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシニ，30歳頃ヨリ臍部ニ時々疼痛ヲ訴フルニ至リ，ソノ度ニ鎮痛劑ノ注射ヲ受ケタリ。40歳以後ハ其ノ回数少クナリシガ 尙1年ニ3—4回斯ル發作アリタリ。而シテ腹痛アル度ニ嘔吐ヲ伴ヒタルモ 1度モ黃疸ノ現ハレタルコトナク，亦血尿モアリタルコトナシ。當時血液ワッセルマン氏反應陰性ナリキト。

現病歴 昭和7年11月，突然惡寒ヲ覺ヘタルガソノ際右季肋部ニ壓痛ナキ線狀ノ腫瘍アルヲ氣付ケリ。12月15日急ニ腹痛ヲ訴フルト共ニ此ノ腫瘍ハ増大シテ小兒頭大トナリ，且壓痛モ存在スルニ至レリ。當日數回嘔吐アリシモ發熱ナク亦黃疸，血便，血尿等ヲ認メザリキ。カクシテ昭和8年1月17日，右季肋部ノ大ナル腫瘍ヲ主訴トシテ即日入院セリ。

現定 體格營養共ニ佳良ニシテ筋肉ノ發育良ク皮下脂肪緻豐富ナリ。皮膚及ビ粘膜濕潤ニシテ貧血セズ。黃疸，浮腫等ヲ認メズ。頸部，淋巴腺腫脹ヲ觸レズ。胸部左右對稱ニシテ肋間腔陷入シ居ラズ。肺臟打診上並ビニ聽診上全ク異常ナク，又肺肝境界ハ稍々高く右乳線ニ於テ第5肋骨ニ相當セリ。心臟大サ尋常ニシテ且心音純ナリキ。脈搏大サ並ビニ強サ尋常ニシテ整正，1分時82ヲ數ヘタリ。

局所所見 腹部ハ一般ニ稍々膨滿セルガ，右上腹部，殊ニ丸ク腫脹シテソノ部ノ皮膚多少發赤シ居レリ。皮下靜脈擴張，胃腸蠕動充進等ハ認メズ。

觸診スルニ右上腹部ニ於テ小兒頭大ノ，割合ニ硬キ表面凸凹ナキ腫瘍ヲ觸レ，周圍トノ境界ハ明ニシテ上部ハ肋骨弓，下ハ臍ノ高サ，左ハ殆ンド正中線，右ハ側腹ヲ廻リテ背面ニ及ベリ。腫瘍ハ前後ニ僅ニ移動セシメ得ルモ上下ニハ移動セシメ得ズ，亦呼吸運動ニヨリテモ移動セズ。腫瘍ノ前面ハ腹壁ト癒着アルモノノ如ク他ノ部ニ比シテ軟カニシテソノ部ニ波動ヲ感ジ，輕微ノ局所熱感アリタリ。腫瘍ハ一般ニ自發痛，壓痛共ニ著シカラザリキ。

處置並ビニ諸検査 本患者ハ昭和8年1月17日入院後 2月9日退院シテ外來ニテ處置ヲ受ケシガ，6月17日再入院ヲナシ9月16日死亡セリ。ソノ間ニ行ハレタル處置並ビニ検査ヲ各項目ニ從ヒテ擧グレバ次ノ如シ。

(1) 切 開 術

切開ヲナシテ粘開ニシテ器縁ヨリ高く盛り上ル如キ淡青黃色ノ膿ガ日々多量ニ排出セラルルニ拘ラズ，小兒頭大ノ塊ハ少シモ縮小セズ，亦他ニ波動ヲ觸ルルニ至リシタメ數回ノ切開ノ必要アリタリ。

1月18日 右上腹部ニテ右乳線ノ稍々外方ニテ小切開。

6月16日 上腹部ニテ殆ンド正中線ニテ小切開。

7月7日 臍ノ稍々右方ニテ小切開。

7月11日 前回ノ切開創ノ稍々外方ニテ小切開。

8月18日 6月以後ニ加ヘタル3ツノ切開創ノ間ヲ開キ1ツニ連絡セシメタリ。

(ロ) 4%複方鹽酸「エメチン」注射

膿中ニ「アメーバ」ヲ見出サズ。亦膿培養ニ於テ常ニ連鎖狀球菌ヲ認メタルガ，外的處置ノミニテ經過抄々シカラザルニヨリ或ハ「アメーバ」ガ肝臟膿瘍ノ根源ヲナスニアラズヤト考ヘ數回「エメチン」注射ヲ試ミタリ。

第1回 5月10日 0.5錠 11日，13日 1錠宛。

第2回 7月10日—13日 1錠宛。

第3回 7月24日—27日 1錠宛。

第4回 8月7日—9日 0.5匁宛。

以上ノ如ク注射ヲ行ヒタルモ少シモ好影響アラザルノミナラズ最後ノ時ハ惡寒發熱ノ如キ副作用ヲ呈シタレバ以後中止セリ。

(ハ) 血液検査

5月10日 ワ氏反應陰性。

血球検査ノ結果ハ第1表ヨリ第3表ニ示サレタルガ如シ。

第1表 血球數並ビニ血色素量表

検査種別 日 附	赤血球	白血球	血色素(ザーリー氏)
17/VI	2950000	8500	61
10/VII	3490000	9600	70
12/VII	3190000	9000	69
14/VII	3320000	9000	72
24/VII	3370000	9400	71
28/VII	3210000	9200	70
7/VIII	3310000	13200	74

以上ノ成績ハ可成リノ貧血ト白血球過多ノ状態ヲ示シ經過中大シテ變化ナク繼續セリ。

第3表 前表ノ中性多核白血球ノ核ニヨル分類表

核種別 日 附	I	II	III	IV	V	合計
17/VI	21	23	11	6	0	61
10/VII	16.5	23.5	16.5	5.5	0	62
14/VII	15.5	32	18	2	0.5	68
24/VII	38	23	6.5	0.5	0	68
28/VII	18.5	27	17.5	4.5	0	67.5

ソノ後第3並ビニ 第4回ノ切開時寒天培養ヲ行ヒタルニ常ニ同種ノ菌ヲ見出シタリ。7月10日純培養セル菌ヨリ滅菌生理的食鹽水ニテ1匁中鳥潟式沈澱計4目盛ノ割ニ菌體ヲ含メル浮游液ヲ作り、之ヲ14瓦ノ「マウス」ノ腹腔内ニ注入セシニ、菌液1匁ノ時ニハ2時間2分ニテ死亡シ、0.5匁ノ時ニハ、10時間14分ニテ死亡セリ。亦鳥潟式沈澱計 1.5目盛ノ割ノ菌浮游液ヲ作り前回同様ニ「マウス」ニ就キ實驗スルニ、0.25匁ノ時34時間ニテ死亡シ、0.15匁ノ時ハ生存セリ。次ニ5目盛ノ菌液ヲ作りソレヲ家兎ノ皮下筋肉内、肝臓内ニ注入スルモ膿瘍ヲ形成セザリキ。

尙コノ菌ヲ研究スルタメ培養ヲ繼續シタリシガ11月中旬ニ至リ検査シタル結果ハ次ノ如シ。

普通寒天並ビニ血液寒天培地ニ生ヘ血液寒天培地ノ溶血現象陰性ナリキ。

菌液腹腔内注入後死亡セル「マウス」ノ脾臓ヨリ培養ヲ行フニ24時間後ニテハ陰性ナリシモ、48時間後ニハ全く同様ノ「コロニー」ヲ得タリ。之ヲ肉汁ニ培養スルニ24時間ニテ輕度ニ濁濁シ、48時間ニテ菲薄ノ菌膜ヲ作レリ。コレヨリ塗抹標本ヲ作り鏡檢スルニ定型的ノ連鎖狀球菌ナリキ。中性紅葡萄糖培地ニ穿刺培養ヲ行ヒシニ瓦斯形成アリシモ著シカラズ。乳糖「ラクムス」ヲ赤變セシメタリ。

要スルニ粘液形成連鎖狀球菌ノ1種ナルモノノ如シ。

經過 前述セル如ク切開ヲ數回加ヘ多量ノ膿ガ排出サルニ拘ラズ、腫瘍ハ少シモ治癒ノ傾向ヲ示サズ。然ルニ體温ハ日々37度餘リノ輕度ノ發熱アルノミニシテ局所ニ膿ガ溜溜シテ波動ヲ觸ルルニ至リ新ニ切開

第2表 白血球分類表(%)

白血球 別種 日 附	「エオヂン」性 嗜好細胞	鹽基性 嗜好細胞	中性多 核細胞	淋巴球	移行型 大單核球
17/VI	1.0	0	61	31	6.5
10/VII	0.5	1.0	62	32	4
14/VII	0	0.5	68	28.5	3
24/VII	0.5	1.0	68	29.5	1
28/VII	1.0	0	67.5	30	1

白血球ノ種類及ビソノ率ニ於テハ正常ト變リ居ラズ亦中性多核白血球ノ核ニ就テ觀ルニ 7月24日ニ1型ノモノ増加シタリシガ、ソノ他ノ時ハ同様ノ状態ヲ示シタリ。

(ニ) 膿中ノ細菌檢索

6月16日 切開時膿ヲ直ニ血液並ビニ普通寒天培地ニ塗リ48時間後檢スルニ、大ナル比較の透明ナル半球狀ニ盛レル多數ノ「コロニー」存シタリ。「コロニー」ハ粘稠ニシテ粘液產生アリ溶血現象ハ認メズ。染色塗抹標本ニヨルニ、中等大ノ球菌ニシテ連鎖狀ニ排列シグラム陽性ニシテ被膜ヲ有シタリ。

ヲ必要トスル如キ時ニモ體溫ノ狀態ニ少シモ變化ヲ示サザリキ。斯ノ如ク長クモナラネバ惡クモナラヌト云フ狀態ニテ續キ居タルガ8月18日切開後6日目ヨリ38度ヲ越ユル熱發アルト共ニ食欲皆無トナリ、黃疸、皮下溢血等現出シ全身衰弱ヲ加ヘ終ニ9月16日不幸ノ轉歸ヲトリタリ。

死後ノ検査 膿瘍腔ヲ檢スルニソノ底部ニ於テ、變化セザル肝臓右葉ノ下面ニ、丁度膽嚢ノ存スベキ位置ニ長サ約13釐、直徑5釐ノ周圍ト癒着セル瓜形ノ腫瘍アリ。2箇所ニ於テ破レテ膿瘍腔ト交通シ居レリ。コノ腫瘍ハ周圍ト癒着セルト雖モソノ境界ハ明白ニシテ腫瘍ソノモノガ浸潤シ居ルガ如キ狀態ハナカリキ。之レヨリ試験の切片ヲ取リシニ腫瘍壁ハ厚ク強靱ニシテ内容ハ宛モ牛肉ノ挽肉ノ如キ物ヲ以テ滿サレ、ソノ間ニ切開創ヨリ常ニ分泌サレ居タリシト同様ノ淡青黃色ノ粘稠ナル膿ガ混リ居タリ。

鏡檢所見 大部分ハ血管擴張ト充血ヲ示ス細イ結締織素上ニ圓柱細胞ガ竝列シテ縱横不規則ニ交錯シ、コノ上皮細胞ニ圍マレテ不規則ナ空隙ガ造ラレ、コノ中ニハ漿液様物質ノ凝固セルガ如キモノ、剝脱上皮、又ハ赤血球等ガ種々ノ狀態ニ充滿シ居レリ。他ノ1部ニハ壞疽部アリ、又1部ニハ明カニ膿瘍壁ト見ラレル著明ナ圓形細胞浸潤ヲ示ス叢組ナ部モアリ、上記圓柱細胞索ノ不規則ナ配列ヲ示シテ増生シタル狀態ハ正常組織ト見做ス可カラザル程度ノ不定型ヲ示スモ、圓柱上皮細胞ノ箇々ノ狀ハ甚ダ不規則デモナク、又核分裂像モ非常ニ少シ。大體ノ所見ハ乳嚢狀囊狀腺腫ニシテ1部炎症性ノ圓形細胞浸潤ヲ示セルモ癌腫ト云ヒ得ル程ノ惡性化ハ認メラズ。

結辭 良性膽嚢腫瘍ハ稀有ナル疾患ナル上、特有ナル症狀ヲ呈セザルニヨリ、手術或ハ剖檢ニヨリテ初メテ見出サル、コト多ク、臨床上大シテ意義アルモノニアラズシテ、普通ノ成書ニモ特別ノ記載ナキ位ナリ。實際何等ノ症狀ヲ呈セズシテ經過スルカ、或ハ痼痛様疼痛ヲ反復シテ膽石症ト誤診セラル。Pels Leusden氏、Dominici氏、Mölle氏、Risak氏、Király氏、Kehr氏ノ各1例ハ總テ膽石症ト見做サレタリ。余等ノ例ニ於テモ30歳頃ヨリ臍部ニ激痛ヲ度々訴ヘタル既往症アレバ膽石症ガアリテ之ニ歸因セル肝臓膿瘍ナルベシト思惟サルベキ様ノ例ニシテ、9ヶ月ニ互リテ處置シナガラ膽嚢腫瘍ナルベシト云フ疑スラモ生ゼズ、死後始メテ見出シタルナリ。本症ノ如何ニ診斷ノ困難ナルカヲ思ハシム。

又良性膽嚢腫瘍ソノモノハ治癒ハセザレド之ノミニテハ豫後不良ト云フニアラズ。サレド本例ノ如ク一旦化膿傳染ヲ起セバ、膿ヲ排出スルモ治癒ヲ妨ゲテ終ニハ全身衰弱ノタメ倒レルニ至ルコトアリ。化膿セズシテモ亦將來惡性腫瘍ニ變化スル可能性ハ充分ニアリ。

要スルニ診斷ハ膽石症、ソノ他何ニテモアレ、開腹シテ膽嚢腫瘍ヲ見出シタル時ニハ必ず膽嚢摘出術ヲ施スベキモノトス。(完)

欄筆ニアタリ細菌檢索ニ際シテ名古屋醫科大學細菌學教室宮永助教授並ビニ木山學士ノ御教示ヲ得タルコトヲ記シテ茲ニ感謝ノ意ヲ表ス。

主ナル引用文献

- 1) Dominici; Ueber einen seltenen Tumor der Gallenblase. Arch. f. Klin. Chir. Bd. 96, II. 2, S. 486. 1911.
- 2) Kehr; Die gut und bösartigen Neubildungen der Gallenblase und der Gallengänge unter besonderer Berücksichtigung einer Erfahrungen. Ergeb. d. Chir. und Orth. Bd. 8, S. 471, 1914.
- 3) Király; Gallenblasenadenom. Arch. f. Klin. Chir. Bd. 178, H. 4. S. 780, 1934.
- 4) Mölle; Ueber Papillome der Gallenblase. Bruns' Beitr. 99, S. 173, 1916.
- 5) Pels Leusden; Ueber papilläre Wucherung in der Gallenblase und ihre Beziehungen zur Cholelithiasis und zum Karzinom. Arch. f. Klin. Chir. 80. S. 128, 1906.
- 6) Risak; Ueber polypöse Tumoren der Gallenblasen. Bruns' Beitr. 138, S. 382, 1927.
- 7) 副島廉治; 孤立性膽嚢茸腫. 日本外科學會雜誌, 第25回, 第8號. (大正13年).